

一般社団法人晴風学舎設立に寄せて

野口晋哉

独立について

このたび、公益社団法人整体協会より身体教育研究所が独立し、新たに一般社団法人「晴風学舎」を設立する運びとなりました。二〇二六年一月十四日に、正式に設立、となります。

まずは、これまで身体教育研究所の活動に参加して下さっていた皆さまに、多大なご心配と戸惑いをおかけしたことを、心よりお詫び申し上げます。

突然の変化に見えるかもしれませんが、この独立は、ある日唐突に決断されたものではありません。むしろ長い時間をかけて、避けがたく浮かび上がってきた「問い」に、正面から応答しようとした結果でもあります。

私は以前から、「組織は離合集散を繰り返し、そのたびに丈夫になるものだ」と考えてきました。分かれることは、必ずしも弱体化を意味しません。むしろ、何を大切にし、何を譲れないと感じているのが明確になる契機でもあります。それは不健全な出来事ではなく、自然な現象であり、ある意味では健全さの証でもあると思っています。

今回の独立もまた、誰かを否定するためのものではありません。

「受け継ぐ」ことには、さまざまなかたちがあります。組織かもしれませんが、技術や慣習、風習かもしれません。ただ、それぞれがそれぞれの信念を引き受けた結果として、別の道を歩むことを選んだ——それだけのことだと、私は受け止めています。

整体という営みの位置

整体協会の「整体」という営みは、そのはじまりから一貫して、療術とは異なる位置を模索してきました。

野口晴哉の実践は、精神と身体、技法と生活のあいだを「愉気」という行為によって結び直すものであり、特定の治療行為や医療的枠組みに収まるものではありませんでした。

国家資格として認められない療術が厳しく取り締まられていた昭和の時代背景のなかで、整体は「医業類似行為」としての正当性を求める道を選ばず、「体育」という概念のもとに整体協会の方針としてまとめられていきます。

しかし、それ以後も、昭和五十三年の広島における医業類似行為違反疑いで整体コンサルタントの任意取り調べ、近年の野口晴哉の名を冠した「整体師」による刑事事件への捜査協力の要請など、整体協会は幾度も社会との緊張関係に晒されてきました。そのたびに、協会の運営主体である理事会は「体育としての整体」を理論化し、制度的な説明を引き受けてきたのです。

この歴史は、単なる過去の出来事ではありません。人間の「身体」や「生死」をめぐる営みが社会制度と交差するかぎり、「整体」は今後も、そのあり方を問われる存在であり続けると思います。

身体教育研究所が担ってきたこと

設立から三十五年間活動を続けてきた身体教育研究所は、整体協会の体育的特徴である「相互研修」を、より先鋭なかたちで実践することを目的としていました。同時にそれは、整体を特別な技能や専門家の領域に閉じず、より広く「一般化」しようとする試みでもありました。

研究所では、「愉気」「活元運動」「錐体外路系の訓練」といった専門的な言葉を、そのまま教義として扱うのではなく、「触れる」「動く」「他者と出会う」「他者性を自覚する」といった、誰もが実感できる言葉へと置き換えながら、「整体を稽古する」というかたちで実践を重ねてきました。

整体はしばしば、「受けるもの」「調整されるもの」と理解されがちです。しかし、稽古という概念を導入することで、整体を「自分自身の身体と関係を結び直す行為」として捉え直すこと、そのための場をつくることが、身体教育研究所の大きな役割でした。

実際、整体協会が内閣府認定の公益社団法人として認定を受ける際には、身体教育研究所で行われていた稽古の風景や内容が提示され、「体育とみなせる事業」として信頼を得るに至っています。

こうした活動を通して、私たちが一貫して共有してきた前提は、ただ一つでした。

自分では操作できない領域が、自分の身体の中に存在していることを、自覚し、生きること。

この考えは、野口晴哉が繰り返し語っていた、「体は仮の名辞にすぎず、まず働きがあり、その働きが体を形づくる」という認識に通じています。すべての始まりは動きにあり、名称や理論は後から便宜的に与えられたものにすぎない——その姿勢です。晴哉自身もまた、自らの思想や人物像が神格化されることを望まず、名称や形式に囚われるのではなく、本質を捉えることを後世に託していたように思います。

そしてこの気づきは、活元運動という特定の方法、もしくは信仰だけによってもたらされるものではありません。音楽を聴くこと、歩くこと、誰かと話すこと、場に身を置くこと。そうした日常の行為のなかにも、同じ質の気づきは現れます。

身体教育研究所の体育活動は、こうした変化を、個別の技法や方法論の問題に回収するのではなく、野口晴哉という人物の背後に広がっていた、より大きな文化的な地層との関わりとして捉えようとしてきました。

身体の変化は、個人の内側だけで完結するものではありません。それは、時代や生活、芸術や思想と響き合いながら立ち現れるものであり、その全体像に触れようとするとき、私たちの視線は、必然的に「整体」という名称の外側へと開かれていくのです。

「晴風」という名について

個人的な話になりますが、少しお付き合いください。

私は現在、狛江にある旧・野口晴哉自邸に稽古場を構え、活動を続けています。

ある時、その稽古場に、とある方が活けた花を目にしました。なぜかその花が、私自身が考えてきた全体のあり方と深く共振しているように感じられ、直感的に、その方に定期的に花を活けていただくようお願いしました。

しばらくして、その方が、ぼつりぼつりとご自身の体験を語ってくれるようになりまして。昭和四十八年、本部道場で行われた野口晴哉先生の書道展で、花を活ける役を任せられたこと。活け終えた花を、野口先生が少しだけ手直しし、「これでよい」と言われたこと。当時は、何をどう直されたのかまったく分からなかった。しかし、その花の姿だけは、今も鮮明に目に焼き付いている、と。

それから五十年が経ち、その方の人生の節目には、いつも花があり、その背後には、あるとき野口先生が活け直した花の姿があったと言います。そして最近になって、ようやく、あれが何だったのかが分かった、とその方は語ってくれました。

——あれは「体」だったんだ、と。

私は、この話を聞き、とても腑に落ちました。

というのも、その方が活けた花の前に座ると、自然と臍に結ばれ、眼差しは花へと向かいます。そこにある重さと軽さ、動きのあり方と止まり方、艶やかさと静けさ、緊張と弛緩。それらが同時に在る感じが、はつきりと伝わってくる。

やがて視野は花器へ、花台へ、床の間へと広がり、立ち上がって部屋全体を眺めると、その空間いっばいに、生き生きと潑刺とした元気が満ちている。私はそれを見て、「これは元気な体と同じだ」と感じました。

では、この方が野口晴哉から受け取ったものは、いったい何だったのでしょうか。

それは、整体ではありません。言葉でもなく、技術でもなく、体系化された理論でもありません。胸椎八番もなければ、整圧もない。ただ、そっと受け渡され、五十年の時を経て、僕のもとへとその方を通じて届いた、今ここに在る野口晴哉の「何か」です。

私は、その名づけがたい、しかし身体に残り続けるものを、「晴風」と呼びたいのです。

晴風学舎で行われること

晴風学舎で行われる稽古の風景は、これまでの身体教育研究所の稽古風景と変わることはありません。

私たちは引き続き、「整体」を日本文化の一つとして捉え直し、それを「稽古化」すること、野口晴哉が遺したものの本質をそのまま引き継いでいきます。変わるのは制度的な枠組みの一部であって、稽古の質や佇まいそのものではありません。

和服を着て畳の上に座り、触れ、動き、見知らぬ他者と出会う。息一つとなって日常がふと非日常へと転じる、その経験を、それぞれが日常へと持ち帰り、日々の営みの中で工夫し、持続させ、そしてそれが途切れたとき、また畳の上に集う。その循環こそが、個別稽古においても、集団稽古においても、変わることはない風景です。そうした経験の場を、これからも私たちは開き続けます。

そうした積み重ねを通して、身体の中に確かに存在している潑刺さが、実感として立ち上がってくる。その感触が「晴風」として、私たち一人ひとりの内に残っていくことを願っています。

(二〇二六年一月)

役員構成

名誉会長	室伏広治
理事長	野口裕之
専務理事	野口晋哉
常務理事	野口順哉

一般社団法人

晴風学舎